

河童相傳

胡瓜遣

初編

下

10

15

20

25

30

A753
2c

相傳 胡氏遺初編下之卷

善惡坊 假名垣魯文戲著

第三章 水の事

水の世用欠く。ぼろぼろ。君の潤澤も等しく。
 蒼生も是が為小養育せられ。物も化し。食
 料を補ひ。此物の清濁もよし。其味も佳し。
 不可きあり。海水も人を浮べ。萬里も旅行せ
 め。河水も舟を通す。内地の運送を自由あり。

月八 遺初

48-7757

む。野中の清水の奥同者の鍋きを潤し。街上の
振舞水の。人力車夫の息を休む。砂糖の富士の
六月の十五日の消えんとす。白玉餅冷泉と
混交し。沸騰水。測ちのガラスの口を飛して。花
火の音の擬ふ。その中。小米の水の貴きや。所
謂百薬の長なる者あり。爵を散り愁を拂ひ。
皇漢洋の民と始め。六大洲中水を逐ひ草を
索ねて住居を轉す。野蕃土俗の黒人ゆき。是

を飲すぎる者もあく。下戸の三分で上戸が七分
飲めば忽地喜見城飲す。海は須麻の浦林し。
過せば面の明石瀉。なる高砂の謠から果の放
歌のどろんどろん狂水の形相と。御覽候らへ
らるる

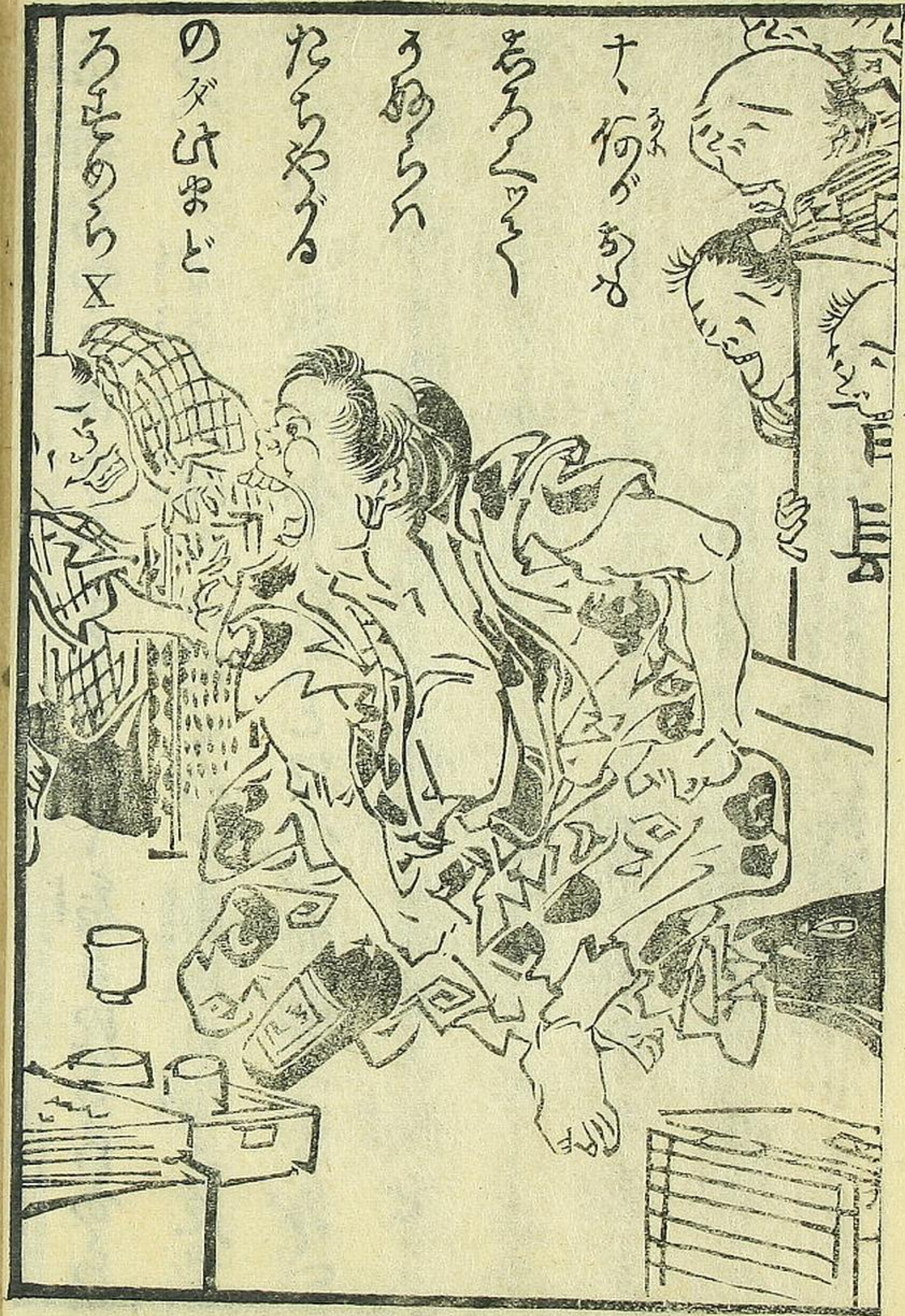
○醉狂の放心

イヤと云ふ先生アハハハ先生と云つてそのあは
捨せらるるナどろだ先生デモ先生アハハハハト



月八日

口



吉原

二

かげまゝもかゝられた大皇國東系の佐人あま
 あべ早通を知ら移入りたつげつらのる藤ツ
 つらめがそまゝのぬあれたこの肉の主人りり
 殺しつゆ今湯あびつたところらへかきつ面を
 えろげくまづこのの又ビイルの一本も飲こ
 さまやうかとおツく脱走しつあこまおま
 じつめコレ裏匠むん鹿今坂まうかん砂羅豆
 の辻占で活室の二階の新造を張るけるをり

が肉儀志やアあるめくあまが持糸のゴフランデー
 を飲ンでゐるのを世流へ移をぶらけつやう面
 をしてを物むろり志移つて天物箱の一方も
 まづむがよろろいの上ととまあらよ下がまゝりこれ
 とまらん坊が合係まきけつつるトントまほふ
 あゝぬへサアくらあく神薬があぐるぞとある
 あらとあてえろりイヤうんとまおトならあびつひま
 げてあつらひをまきつらヲヤ先刺のぎんぎりのあけけの

男まあうあう 奴やつあじろをえせやアガツツナよりの奴やつダ
 人かんげんるの一いつ匹びつどりけ入いか自ト立ち自ト立ちの権けんだどんみ
 奴やつが素そようとらもびくともまるの志しやア奴やつ人ひとど
 サア統とうづづでも後か海うんでも持もツツこの塩えん梅ばいして
 食くツツゆるぞイヤ養よくでもららエめをまるもンラ
 何なに碎さいツツるなるから車くるまへでも智ちツツて帰かへきとら
 方かたきふ世せ活かく知るぬらの指さし揮ひとらけるめんら
 自おの立ち自おの立ちの権けんがあるけい牛うし畜ちくの海うみいりら

飲のンンでも舌せん授おとの器き械けい使しいたからる志しやり
 後ごでもぬけつら志しらんことる車くるまや人ひと力りき車くるまへ
 の指さ幣へいダ有ありやアまんみ飲のンン志しやり
 たりけつことるぬけしめるみダ子こイコレク
 丁てい雅ぎや方かたきふ最もと水みづをもちてこのサナナ何なにを
 きらり〜ゆつ〜なるの志しをやくせぬと虎こ子こ
 玉たまをらぬて河か童どうと毒どく海うみツツ相あ礼らいと賢けん
 男おとふしてらるるむる麻あツツつらめが志しやり〜ら

ゲマ〜イ〜

第四章 風の事

吹ヨ川風揚ヨ簾ヨ中の歌妓の程の能サ。
 三弦の絲の柳橋四時の盛るも取別テ其來ヨ
 びら〜白妙の肌をまきやの衣手小。嬋姑と
 まり〜た左り褙箱持ガ供小立姿ぞんと身小
 染心戀風ガ。竟ヨ風邪の元とあり。焚小浮さ
 き浮と出〜。大棧じ〜上流行き。ヘイ當り

ヤス當的の念ガ届リを嬉〜の森。ニツ双ベ〜
 枕橋泊りい首尾の向ふ越〜。彼八百松ふら
 ひを附意ハ空小有頂天或ハ上流の歸り船
 隠も遊びハ梅川の樓上小封と切餅の二十
 五両と蔭散。金申名貧の病ひとあ〜。元
 來浮氣の風小犯さ〜。煩惱の焚小暖め〜れ。
 色欲の火を燃せ〜あり。風ハ空氣の動〜とな
 づ〜。空氣ハ人の情小等〜。情動けハ浮氣の

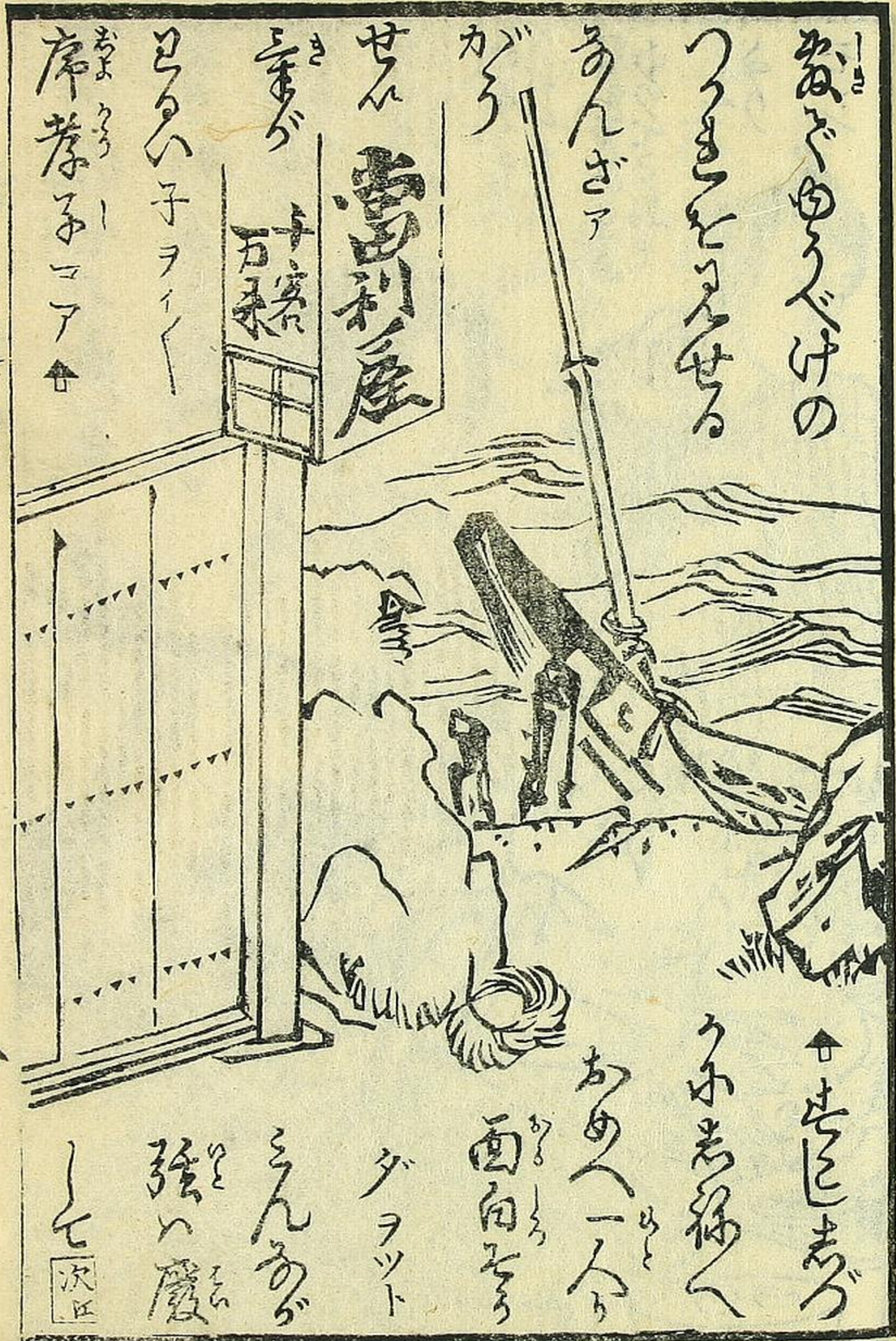
胡底道補下

六

風とあるの理ゆへ。風邪の諸病根元ある事此理と以て推さべし

○柳橋の春風

一中
ふーしちむさむさのたのびふらふららんむかし家の窓の
○ライク一也昔さんまのめひらく筋ざらうが
お附合るせんおその坊エサゆらおのへそらく
してゐるのうらやゆるぐ松皮菱と出榎栲でもあつ
たのら子ゆぞおどるべし一子エおせのちやんこの産



あまごゆるぐけの
つらまごゆるせる

あんがア

かろ

せん 雲利屋

まき

十家
石末

ひらひ子ライク

席孝子コア

▲此にまが

う小若孫へ

あめ一人

面白

ダラット

まんあ

強ハ慶

し七 次

江戸遊覧記

續キ 浮世おぼしめ

どりかるとさびしサ

あつちの

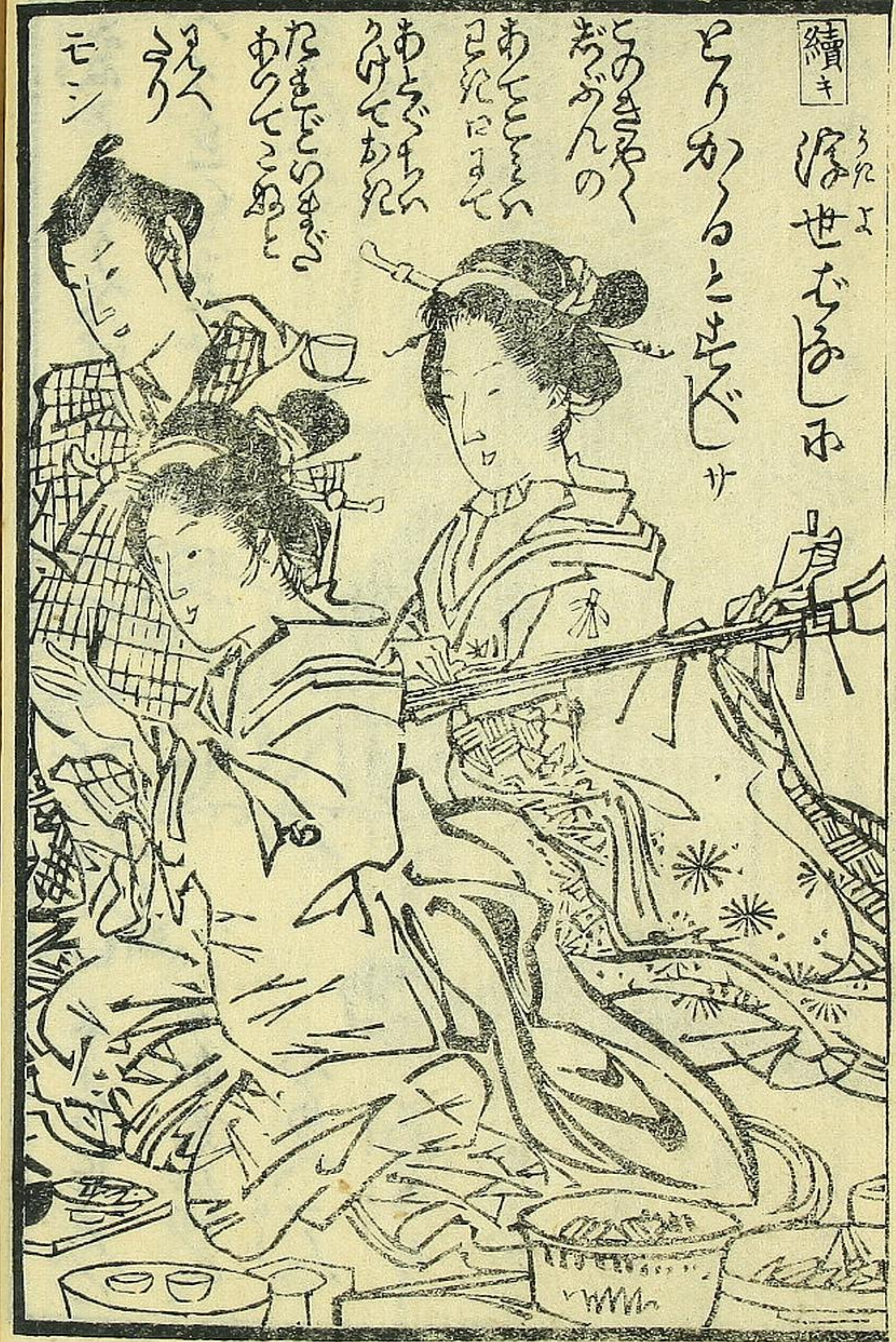
あつちの

あつちの

あつちの

あつちの

あつちの



おちゆんどうでス

け大きん器

らつときあ山と

あちやアツち

てんぶらやせん子

あつちのあつち

けり子春まあけりやア

二之びゆううイヨハイ

次江

晴舟



續十 さつたトさつねのへ工室初ウそのやニかん
 め志やニかんトさらひ合廻バドントサアめー
 あぶッてあしほしあさんツライくおろらアヤ宿の
 女をう あんまりあ〜〜たすらあ〜〜んあ〜の食
 をとぶ おをヲアアあぶよあらう梅川あ〜〜どかめ
 湯もちあんとあ〜あ〜あ〜ト神時計をば〜
 モウ十二字ダのつと世活あ〜の耐治あ〜どの
 どんあ〜んでげスそ〜〜カちあんの穀が喰

福へとおせんさんあ〜いのどろ〜〜入 親書津先生
 小親〜〜の〜〜から喰やア志福へう〜〜
 席先生先生のあ〜あ〜海岸へ船をつけて借
 福の箱屋とりあ〜あ〜でだんすりのどろんけん
 う子よのむし〜〜サア〜大杯であ〜るじサあ〜
 モウ春め福へ〜〜め〜あ〜るあ〜あ〜あ〜
 おせうどろせ〜〜サ〜〜ヲヤ〜〜あ〜あ〜
 し〜あ〜を溜〜張ッた子さ〜あ〜の借馬の先

月夜書

一

生せいくくトキニトキニ明あきら日ひののまんまんあがあがお約束おやくそくでもでもある
 か子かこああんんエエそのそのつつのの妙めうだだああけけののややアアけけ連れん申しんで
 飛と井い戸どへへ押お出しとと志しややせせうう那な鉢はち梅ばいを
 ええくく橋はし本ほんをを申しん食しょくササををままらら船ふねをを向むかふ
 橋はしのの押おああげげくく三さんめめづづりりへへああぐぐりりのの永えい機き室しつ
 函はうをを渡わたりり出してて外がい屋やのの梅ばい隣りん亭ていをを夕ゆふ飯ひサ
 隅すみ回かい辺へんももけけ渡わたりりおおわわららひひららけけくくままららせせ
 去き年ねんからら牛うし橋はしああららうう入い藝げい者しやががででたたてて堀ほりと

むむのの載ざいををむむららひひおおややるる世せ帯たいががああくくッッてて酒しゆ法ぽう
 ササ子しヲヲイイクク序お孝うをを君きみのの笑わらへへるる事こと件けんありありサ
 此こせせらら柳りゆう若わききさんさんがが菫しゆん町ちやうにに筋すぢ張はッッたたとといいふ
 ここととだだららおおののいいだだももごごらら志し々々移うつりりううままららぬぬ人ひと
 ヲオああせんせんききくくままここととをを世よ帯たいササ埒らちくくせんせんききをを
 是こゝるる法ぽうでもでもぬぬ人ひとググーーッッのの志し々々ありありササ備びががけけ
 るる獲とのの後のちへのの用ようがが有あッッたたららそのその帰かへりり小
 照しょう隱いん所しよのの宮みや川がはへへああッッてて冊さん那な珠しゆをを見みてておおる

と先ハが通りからツゞきおの巻うまゝのらう
 志やアねんろはると被奴づちまゝにしの食お
 があるが倉席とらう移入ぐ河岸が帰るを
 かりで解きおらうらるあがツゞきあはれ
 志は拙把葉湯の格とあがる中ひや法お
 アめつりやせんが一口ゆるゆる也教彼あらせ
 らまおせうとらあんとら持込たらう幸ひ
 其日の暇キまて有つたらう被奴ゆひのまて

まづ百尺へと繰出して例のおをまてかけら
 とやぐとあらわのま出たる明智光秀の四面
 像をおまてと去年の暮まで道のとある流
 屋の夜あゝおひ来ゆる戯娜りのサ僕も
 一交ぐの箸を採つたところがあるのとびつり
 おららばハイさうあらあやまり関口おらん
 しきかたもどしやまらおまよひらるらあ
 むらサトらうとさぶおあびてあるらあ

何^{なん}が^がう^うせん^{せん}は^はや^やりの^{りの}ど^どらん^{らん}を^をひ^ひじ^じる^るが^が彼^{かの}
 婦^く人^{にん}の^の一^{いつ}夜^や素^す落^{らく}の^の看^{かん}屋^やを^をた^たら^らう^うと^と来^き
 達^{たつ}若^わの^のの^のだ^だら^らた^たら^らと^と閻^{えん}魔^まの^の魔^まに^に出^でゆ^ゆと
 も^も平^{へい}氣^き固^こむ^むだ^だら^らう^うく^くふ^ふと^と味^{あじ}味^{あじ}も^もひ^ひら^ら糸^{いと}
 つ^つと^と親^あ親^あ附^つ合^あと^とう^うま^まと^とん^んと^とあ^あつ^つう^う持^{もち}
 か^かけ^けら^らも^もた^たら^らあ^あや^やア^ア大^お大^お固^こ迫^おき^きの^のせ^せ光^{くわ}光^{くわ}八^は八^はと^とれ
 邪^やとも^も知^しら^らぬ^ぬう^うら^らむ^むせ^せう^うや^やた^たら^らふ^ふあ^あら^らを^を
 か^かけ^けら^らひ^ひら^らう^うで^で切^きつ^つと^とゆ^ゆわ^わし^して^てあ^ある^る善^{ぜん}人^{にん}サ^サダ^ダ

た^たま^まう^うあ^あら^らう^うの^の子^こイ^イヤ^ヤサ^サく^く動^う定^{じやう}と^とう^うら^らう^うん
 あ^あら^らう^うか^かん^んあ^あら^らう^うを^を附^つつ^つと^とあ^あら^らう^うと^とツ^ツ井^いと^と
 出^で店^{てん}は^はし^して^ても^もあ^あら^らう^うの^のき^きや^やア^アあ^あら^らう^うヨ^ヨ

○ 作^{さく}者^{しや}曰^い此^こ男^{おとこ}専^{せん}ら^ら遊^{あそ}里^りさ^さあ^あり^り場^ばの^の通^と
 言^いと^とら^らう^うゆ^ゆえ^え遠^{えん}國^{こく}の^の看^{かん}官^{くわん}よ^よの^の解^{かい}の^の
 た^たま^ま言^ご語^ご多^{おほ}し^し故^ゆに^に其^{その}通^と辨^{べん}の^の譯^{やく}を^を附^つ
 せ^せり

○ 鷺^さ津^つ先^{せん}生^{せい}の^の橋^{はし}町^{まち}の^の住^す人^{にん}相^あ方^{かた}位^ゐの^の

月夜書初下

十三

名譽高く柳橋の歌妓等毎度観相
をとふ序孝光八俱ふ管野の太夫
少て序孝の柳の舞間あり

○筋との色情の筋あり○不見識の

不可なること云○親類附合とい

心安きこと○勘定とい俗におどる。か

ろくせるあど云言葉あり或のナニカ

ガウセイト云タヨウナ事ベシデゲス

あどいふことを癖に注意しよるを

給ふゾー

この筋のうら若娘のあてこたへはあつげりまねはたぐちか
あつてきたのきりせあみやどの女がうらうらふらうらうやきの
あつてしんおまふひくちあつてこのちもつらんあり
あつてしんナトやけいあつてあつてあつてあつてあつて

だるなうあつてライーあつてねどんあり下女
けくあつてあつてアにさうらつてあつてあつて

らそめてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



喜柳のり
揚糸

善羽
文羅鳥

糸ダチトららのごころをたのけあつづか
 としそ法もあまねごとで能のうきやア後
 うそしそ御治のらるうノサアおせんおろ一トッ
 むげやうライオちゆんひさしおろで城は町
 遊傳をまろせおへらこまきふ小唄のあはれ十二ふたあま
 ン源初をくまも福入のんごころナまわりッ
 子めがユウ夫人たまひかあへがあらがトはらある
 から三條線むらりひんあせ入ラットそのらま入

日入

一四

ひくけのやア歌のこ名がま入あやア歌のこ入るど
 らうエヘン 花よとてのけとあく日あはれ
 のをまよる人もあは梅の薫りゆじり花
 のりがまこイこいけいやくと二のあがりイこ
 かんいあまのこいあまのこいあまのこいあまのこい
 うこいあまのこいあまのこいあまのこいあまのこい
 のりうのサアびうとライくこんあが噴ふ結
 うろくコレサ序者ふあめハツとつめ移へ
 たりや盥洗が鴉んぐさうづねが司馬温公靴

割壺みでよくチヨツ鈍癖あ男ダライく
 あらねんどん羅巾く

第五章 雲雨の事

何者でも歌ふ唐詩選劉廷芝の作公予行

可憐楊柳傷心樹 コトクハヤウリウニウツクサキツクハカミ

可憐桃李斷腸花 コトクハトウリニウツクサキツクハカミ

此日遨遊邀美女 コトクハニウツクサキツクハカミ

此時歌舞入娼家 コトクハニウツクサキツクハカミ

目入

下

娼家美女鬱金香

そらだれの影のけしきもつゝの影も
まよてあつとゆふの影やうらやま

飛去飛來公子傍

まづふくむあるか茶巾のあらせ
まのそととびくつゝの影のうら

的的朱簾白日映

まんだくまを日をびやうあでへて
まのそととびくつゝの影のうら

娥娥玉顏紅粉粧

まのそととびくつゝの影のうら
まのそととびくつゝの影のうら

花際徘徊雙蝶

まのそととびくつゝの影のうら
まのそととびくつゝの影のうら

池邊顧步西鴛鴦

まのそととびくつゝの影のうら
まのそととびくつゝの影のうら

傾國傾城漢武帝

まのそととびくつゝの影のうら
まのそととびくつゝの影のうら

為雲為雨楚襄王

まのそととびくつゝの影のうら
まのそととびくつゝの影のうら

俚諺小囊中少錢ありきを水の乾きたるも小

喻ふ原本窮理圖解小曰平たき皿より水と

入るる置けぬ知らぬ間小其水乾きつぎ雨

の後小路の乾き旱魃小池の乾き濕るる

手拭の乾き洗濯物の乾き何ぞや唯こ

きを乾くとのまじりて心と留め

其乾き水之行衛の如何あり一やと尋

ぬふふの皆温氣小由る蒸騰りしやう斯

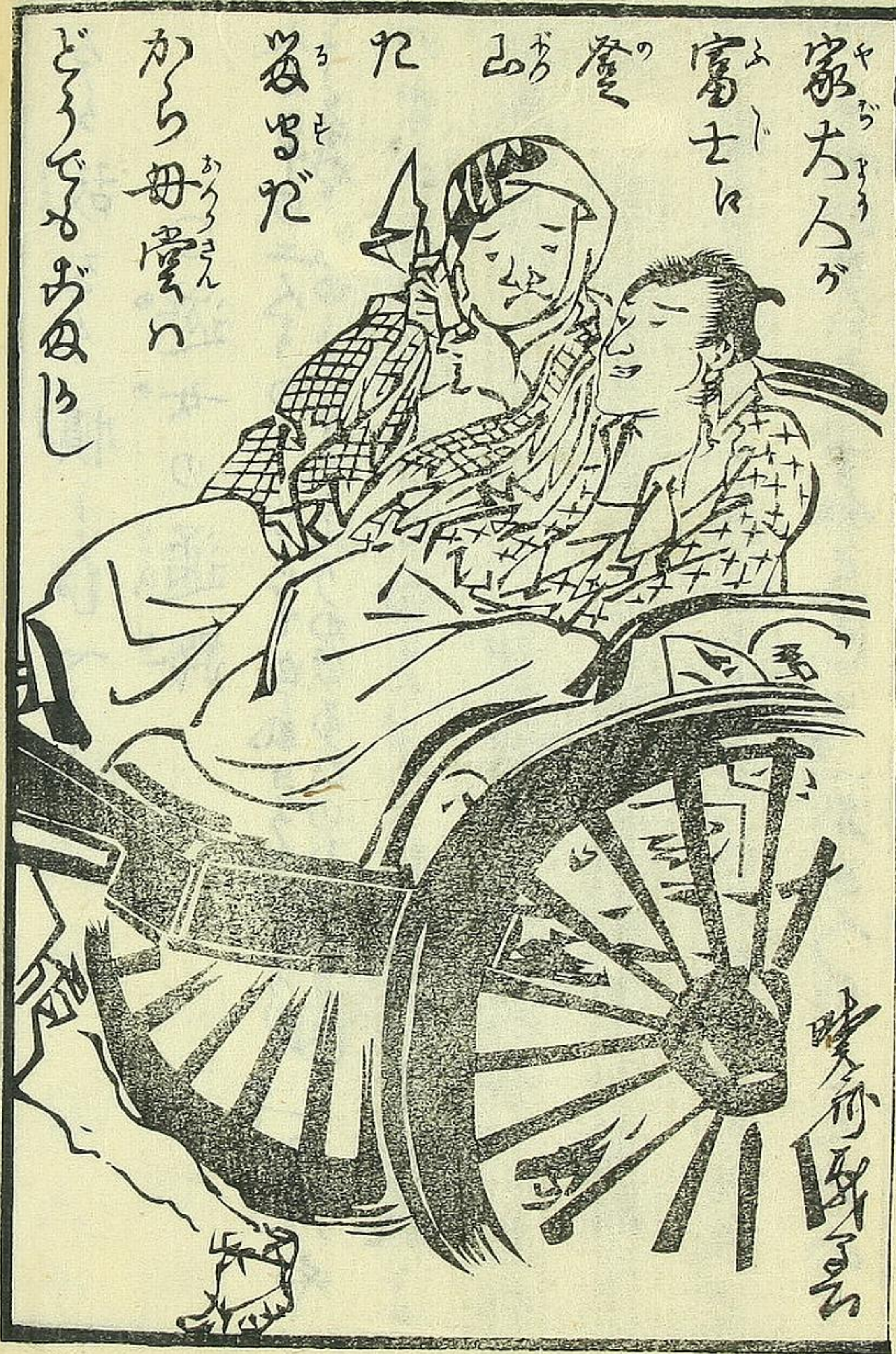
益夜断間あくむりのぢる水氣を名きん
 蒸發氣とりん云々夫つゝ痴情の痴
 情たつと窮理きる小人間色欲の蒸發氣
 強く隆ん小至ま貯への黄金水是が為
 小乾き腹中の潤ひ空く有頂天小登り
 偶雲とちり雨とちりも是が故小身を
 潤まこと至と難く江湖上の少年輩多
 く生前を禍ひ者此蒸發氣の盛んを

るが故あり慎しむべし

○遊女の通路

人カ車の二人りのりりぎまも血氣まうんの目ろつんや
 うの系がのひのらま入どうかけのひのあのち色ははんや
 いちぢのみつ前なせゆべよりの余程とやんよ
 あめいどぢりく肉をあけくまたのハあん
 らア湯からあめいのあゆことまつくあゆう
 とまるとあゆうがふせいらかつたれど
 りんかまらせずらじヨあめいのとこちやア

新編 浮城物語 第十一



家方人が

富士に

登り

た

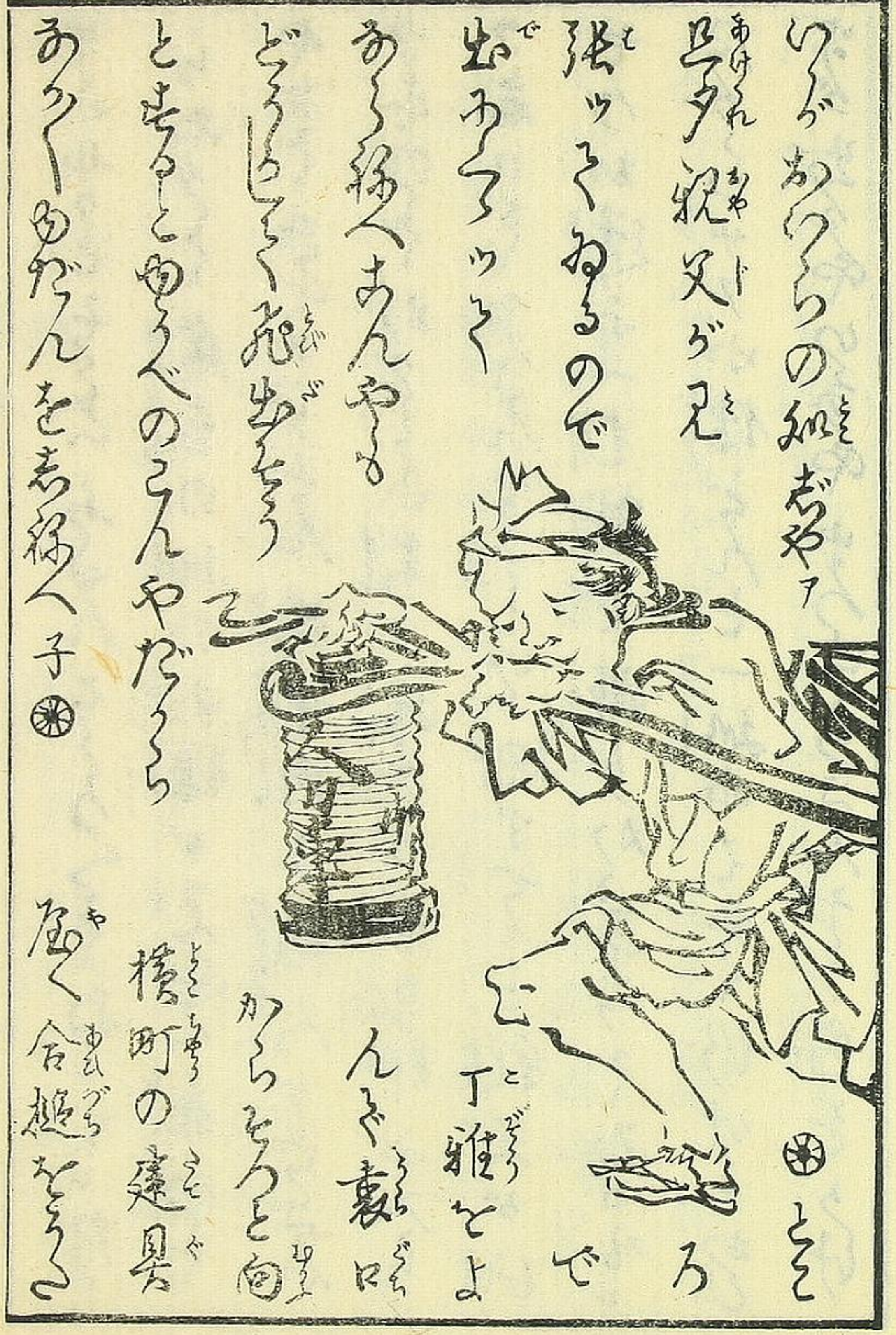
ら

あつた

から母堂の

どうぞおあぬじ

晴夜所云



いがかつらの知あや

あつた

強ッそぬのぞ

あつた

あつた

どうぞおあぬじ

とまるとあつた

あつた

とと

でろ

丁雅をよ

んと

から

横町の建具

屋合

月入

せよやるとそらへあづんららるゝるゝるもしたる
 らあづゝ建吉の祖の小僧がえ世々孝向と
 やつときてヨ今むん講中内小病人がござん
 中世のどあづゝあづり坊くら若旦那ゆ入ら
 ツ志ツとやせん中とら迎せると親父がけ
 せらお送あ一は熱命凝りかつまつゝるるも
 だららサア小僧どんと一知ふとやく坊けとおひ
 中が出るやのあやゆららさんざう肉をうけ

だーたのど 烟葉入をいそぎとまら 八
 志やアあんまり且をそつたら建具屋へ麻が
 ゆくだらう 十ニそぬいかまのびるや味香に
 サ建吉の妻女小鼻づらうがかつゝあるから
 さく夜のあらくあけふお帰りでねーどもに
 お泊中申したるゆとら被女そき者の果だり
 らそらうゆやくゆるのナまやアそらとあんやの
 何処に登樓とあやうやう夕迎のころり

月入書一カハ

二

胡瓜遣初編下巻

中らろくも極やせうとあるある人
あつとひらけあがらあわねふぐらうライ酒ま
ハイ有がたうモシお茶屋中でありやせう
まのやアおよび移へライくまてたが遠入て行
せ彼奴何知へあぐるう跡をつけそとやう
ア移へる。あふせくおひおあ移へ彼等ハ町
並園の山サ丈伏見町に曲ったせく
胡瓜遣初編下巻

発行

- 京都三條通柳馬場
- 大坂心齋橋通南久宝寺町
- 備後町
- 安上町
- 尾張名古屋本町三丁目
- 二丁目
- 東京日本橋通一丁目
- 二丁目
- 芝神明前
- 横山町三丁目
- 浅草草町二丁目
- 本石町二丁目角
- 堺屋仁兵衛
- 伊丹屋善兵衛
- 辺江屋平助
- 河内屋忠七
- 菱屋藤兵衛
- 菱屋平兵衛
- 須原屋茂兵衛
- 山城屋佐兵衛
- 須原屋新兵衛
- 岡田屋嘉七
- 和泉屋市兵衛
- 和泉屋金石衛門
- 須原屋伊八
- 須原屋喜兵衛

書林

010190522887

